時評

評価されるべき人々

屋良健一郎

「現代短歌」（現代短歌社）が創刊された。同誌の連載で面白いと思ったのは「九州の歌人たち」である。九月号・十月号では淺利良道がとりあげられている。大分県に生まれた淺利は「覇王樹」などの同人として活躍し、「大分歌人」や「現象」（のち「朱竹」に改名）を創刊するなど、県内の歌人の団結に尽力したという。短歌史のメインストリームには登場しないが、地方で作歌をし、短歌普及につとめた人々。そのような人々を再評価するこのような連載は貴重だ。思えば、「短歌現代」が毎年十二月に特集を組んでいた「今年の歌壇・全国の秀歌」は、各地方に丁寧にスポットを当てていた。その「短歌現代」の終刊は残念なことであったが、こうして、同誌の性格を引き継ぐ形で、アララギ系・地方歌人を重視する「現代短歌」が創刊されたことは、地方の歌人たちの作歌の励みになっていくに違いない。

・写実派を主に半世紀に出しし新聞社赤信号のメール届きぬ

短歌新聞社の解散、「短歌現代」の終刊が近づく状況をこう読んだのは、編集を職務とする晋樹隆彦の歌集『浸蝕』（本阿弥書店）である。本歌集の特徴のひとつは、編集者の立場からの歌だ。

・多く名を残さず逝きしエディターを思うときあり仕事の帰り

・人の名を多く間違えるパーティーにどうもどうもの口癖のつく

一首目、裏方である編集者の実感。二首目、多くの人と関わるという職務ゆえの実感。これらの歌に、この作者でしか詠めない個性を感じる。

もうひとつの魅力は、初老という立場の詠み方である。

・朝を夜をまことひたひた迫りくる君たち浸蝕をみたことあるか

・あの当りまでと思える人生にいつしか近づき煙草をふかす

・この国の未来に危惧をもつときに青年のごとく昂ぶりやまず

・駈けぬけてきて振り返る余裕なくある夜は陰嚢（ふぐり）をにぎりつつ眠る

・少年のごときときめき　隧道をくぐりぬけ岩走る瀧あおぐとき

一首目、歌集名でもある「浸蝕」が本歌集のキーワード。少しずつ世界の形を変える浸蝕作用。その作用は、歌集冒頭の故郷の海岸から始まり、各地の海岸を浸蝕し、そして時代を変化させる存在として顕ち現れる。一首目は、日本の政治・社会の変化に鈍感な若者への警告ともとれよう。また、二首目のような、加齢による寂しさを詠む一方、青年の「昂ぶり」を持ち、「陰嚢」をにぎる少年らしさも残っている。年をとっても不変な男の芯の部分を詠んでいるこれらの歌が印象的だ。五首目、「岩走る」という枕詞を用いた点も良いが、なにより「くぐりぬけ岩走る」の字余りで、定型に近づけて読もうとする読み手に疾走感を感じさせ、「少年のごときときめき」のエネルギーが際立ってくるのがポイントだ。

歌集の「あとがき」から、仕事の関係上、歌人として注目される機会はあまりないということが分かる。そのような実作者としては不利な立場にある歌人が、第十八回「若山牧水賞」に選ばれたことは、とても重要なことだ。この歌集は、私達の作歌を支えてくれる編集者の存在の大切さに改めて気付かせてくれる。